

# 教育思想史学会

## 第24回大会プログラム

2014. 10. 11 ~ 2014. 10. 12

慶應義塾大学三田キャンパス



主催：教育思想史学会 共催：三田哲学会

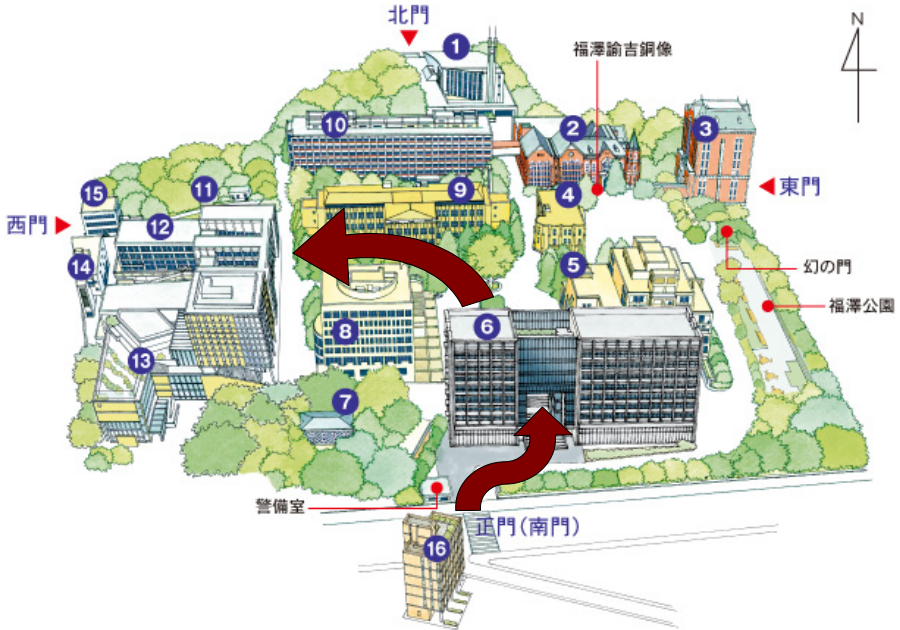
### 大会参加費

一般		学生・非常勤	
会員	¥3,000	会員	¥2,000
非会員	¥3,500	非会員	¥2,500

### 懇親会費

一般	¥5,000	学生・非常勤	¥3,000
----	--------	--------	--------

## キャンパス地図・お食事処案内



- ・ 正門から入って階段を上り、左手奥の**西校舎（⑫の建物）**が大会会場です。階段を上って2階に受付および会場がございます。
- ・ 第1日には学内下記食堂および売店が営業予定です。
  - ・ 山食：西校舎（⑫の建物）1階北側  
営業時間10：30～14：00
  - ・ 生協食堂：西校舎（⑫の建物）地下1階北側  
営業時間11：00～14：00
  - ・ ザ・カフェテリア：南校舎（⑥の建物）4階西側  
営業時間11：00～13：30
  - ・ ファカルティクラブ：北館（①の建物）1階奥  
営業時間11：00～14：00
  - ・ 生協購買部：西校舎内の階段を下り切って正面右手（⑭の建物）  
営業時間10：30～14：00
- ・ 第2日は学内食堂が休業のため、あらかじめお食事をご用意いただくか、学外の飲食店をご利用いただきますよう、お願い申し上げます。
- ・ 第2日は正門以外の門が閉鎖されます。ご注意ください。

# 大会日程

## 第1日 (2014.10.11)

- 9 : 30~            受付 (西校舎 2階)
- 10 : 00~12 : 30  
Colloquium 1 (524 教室) 「戦後教育学」のアリーナ  
——政治・ディシプリン・教育運動——
- Colloquium 2 (522 教室) モノの教育的意味  
——思想史的接近の試み——
- Colloquium 3 (525A教室) 教育思想史研究の対象としての「教員養成」
- Colloquium 4 (525B教室) 今、「京都学派」研究から  
教育学は何を問うことができるか?
- 12 : 45~13 : 45 理事会・編集委員会合同会議(522教室)
- 14 : 00~17 : 00 Symposium 1 (527教室)  
社会の構想と道德教育の思想  
——源流から未来を展望する——
- 17 : 15~18 : 00 総会・奨励賞授賞式 (527教室)
- 18 : 15~20 : 15 懇親会 (北館 1階    ファカルティ・クラブ)

## 第2日 (2014.10.12)

- 9 : 00~            受付 (西校舎 2階)
- 9 : 30~12 : 30 Symposium 2 (527教室)  
私学の思想史
- 13 : 45~15 : 30 Forum 1 (527教室)  
学カテストの暴力性  
——米国における学カテストと評価体制の構築——
- 15 : 45~17 : 30 Forum 2 (527教室)  
デモクラシーが「公衆」を形成する  
——ジョン・デューイとリベラル・ジャーナリズムの時代——

# 第1日 (10月11日)

## Colloquium 1

10:00~12:30 524教室

### 「戦後教育学」のアーリーナ ——政治・ディシプリン・教育運動——

企画者：下司晶（日本大学）

報告者：青柳宏幸（中央大学・非常勤）

本田伊克（宮城教育大学）

司会者：下司晶

香川七海（日本大学・院生）

指定討論者：木村元（一橋大学）

近代教育思想史研究会が標榜し、教育思想史学会に継承された「近代教育学批判」は、戦後教育学の近代評価を問い直すものであったという意味で、「戦後教育学」批判でもあった。私たちがこのように「戦後教育学」と総称する時、それはあたかも盤石な一枚岩であったかのようにスタティックにイメージされがちである。しかし「戦後教育学」とは実際には、多様なアクターたちによる複数の言説がヘゲモニーをめぐる闘争を繰り広げる動的な場であったはずである。その複数性と広がりをも改めて検討すべきではないだろうか。

本コロキウムでは以上の観点から、「戦後教育学」とは何であったのかを再び問い直したい。その際、これまで教育学の自律の観点から切り離して論じられることが多かった、政治や教育運動との関わりに光を当てたい。いかなる政策動向を背景として、各研究集団や民間教育勢力の間で何が対立軸になり、結果として何がもたらされたのか。皆さんと考えていきたい。

## Colloquium 2

10:00~12:30 522教室

### モノの教育的意味 ——思想史的接近の試み——

企画者：今井康雄（日本女子大学）

報告者：池田全之（お茶の水女子大学）

小松佳代子（東京藝術大学）

司会者：今井康雄

眞壁宏幹（慶應義塾大学）

山名淳（京都大学）

本コロキウムは、モノ(thing, materiality)の経験が持つ教育的・人間形成的な意味を、思想的なアプローチによって例示し解明することを目的とする。

ルソーの「事物の教育」やベスタロッチの「実物教授」を想起するまでもなく、モノへの関心は近代教育学とともに古い。教材・教具に関する膨大な議論は多かれ少なかれモノを主題化してきたと言える。しかし、教育の「道具」としてのモノの次元を越えて、モノの経験は、たとえばベンヤミンが「隠れ処の子供」(『一方通行路』所収)で、遊ぶ子供にとってモノがいかに日常的な利用の文脈を超えて鮮明に現われてくるかを印象深く描いているように、人間形成の過程において基底的な意味を持っているのではなかろうか。

本コロキウムでは、自明であったり一般的すぎたりしてかえって対象化が難しいこうしたモノの教育的・人間形成的意味を、現代教育学におけるモノへの関心(今井)、美術館・博物館での展示および教育の歴史(小松、眞壁)、近代哲学思想におけるモノの視座(池田)、アーキテクチュアの思想(山名)といった多様な視点からの接近によって照らし出すことを試みる。

# Colloquium 3

10:00~12:30 525A教室

## 教育思想史研究の対象としての「教員養成」

企画者：宇内一文（近畿大学豊岡短期大学） 報告者：河野桃子（信州大学）

司会者：須川公央（弘前学院大学）

田口賢太郎（香川短期大学）

高柳充利(信州大学)

本コロキウムでは「教員養成」を思想史研究の対象とすることの可能性を探る。教員養成の問題はこれまでも様々な立場や角度から教育学者らによって論じられてきた。しかし、従来の検討は、教育学者の多くが、教員養成のポストに就いていることもあり、下部構造的な関心から論じられ、思想史的アプローチが本格的に採用されることは意外なほど少なかった。あるいは、教育思想が歴史的対象としてとりあげられることがあっても、現代の教員養成に対して示唆を与える役割しか与えられてこなかった。

しかし、思想史研究のアプローチが、現実問題の相対化を重要な任務のひとつとしていることを考慮すれば、教員養成を本格的に思想史研究の対象とすることは、現代に対する示唆としても、迂遠なようにみえて実は有効なアプローチとなり得る可能性があるのではないか。この可能性のなかに、思想史研究の対象として「教員養成」が検討されるべき価値を見出したいと考えている。

上記の問題意識から、本コロキウムでは、教員養成という問題意識を前提として教育思想史にアプローチするのではなく、逆に教育思想の内在的検討のなかから教員養成という問題がどのように浮かびあがってくるのかということを検討したい。

# Colloquium 4

10:00~12:30 525B教室

## 今、「京都学派」研究から教育学は何を問うことができるか？

企画者：西村拓生（奈良女子大学）

報告者：岡本哲雄（関西学院大学）

司会者：西村拓生

神戸和佳子（東京大学・院生）

指定討論者：西平直（京都大学）

山内清郎（立命館大学）

吉田敦彦（大阪府立大学）

山田真由美（慶應義塾大学・院生）

かつて冷戦期、「京都学派」という名称はアジア太平洋戦争における戦争協力の問題と切り離し難く、とりわけ戦後の理念にコミットした教育学において、その名はもっぱら否定的ニュアンスで語られた。しかし近年は、田中毎実や矢野智司等の仕事を通じて、その思想的系譜が再び一方ならぬ存在感を示すようになっており、三木清や高坂正顕といった思想家を研究対象とする若手の研究者も出てきている。たとえば生成や超越へのまなざし、「永遠の今」に触れる臨床性、あるいは「空」の存在論に裏打ちされた「言葉」の内と外との往還、といった思想的契機は、たしかに教育学に魅力的なオルタナティブを提起しているように思われる。他方、しかし現在の京都学派教育学（教育人間学）に対しては、その政治性や歴史的自己認識に関して、あらためて疑問も投げかけられている（たとえば昨年度大会の関根宏明によるフォーラムや、田中毎実編『教育人間学』に対する宮寺晃夫の書評など）。そこで本コロキウムでは、京都学派に関心をいただく研究者が、それぞれの関心のアクチュアリティと研究の方向性を報告し、議論することを通じて、今、「京都学派」を研究することは教育学に如何なる問いをもたらすのか、その可能性を考えてみたい。

## 社会の構想と道德教育の思想 ——源流から未来を展望する——

近代における道德教育の思想はしばしば新しい社会の構想と結びついていた。従来社会とは異なる新しい社会を建設しようとするとき、その社会の担い手の形成が道德教育に期待されてきたということである。近代の古典的な思想においてはその社会とは基本的に国家であったが、今日ではさらに国家を超えた社会（グローバル社会・人類社会・地球社会）が想定されていることもある。想定される社会や道德教育の中身はさまざまであるが、新しい社会の構想が道德教育のあり方を規定するという考え方自体は、公教育としての道德教育にも大きな影響を与えてきた。

その一方で、公教育としての道德教育は、社会の人びとの秩序への期待や治安への不安と関連づけながら要請されてきた側面を併せもっている。新しい社会の構想ではなく、新しい人間や秩序の出現、あるいは古い秩序や規範や習俗の崩壊に伴う混乱や不安に対処するために、人びとは道德教育に期待を寄せてきたということである。

公教育としての道德教育がこの二重性をもっていることは、今日の日本社会も例外ではない。国家のあり方が揺らぐ中で、国家再建やグローバル社会・地域社会の担い手が道德教育に期待される反面

報告者：岩下誠（青山学院大学）  
貝塚茂樹（武蔵野大学）  
森田伸子

司会者：松下良平（金沢大学）

で、いじめ問題などに対応して、学校や社会を安全・安心な場所にすることもまた道徳教育に期待されている。

本シンポジウムでは、現代を過去から切断させて拙速の議論をするのではなく、過去も現在も新しい社会構想が求められ、社会への不安が高まる時代に道徳教育への期待は高まるという視点に立って、まずは近代教育の原点とも言うべき思想に遡及していき、その源流の“高み”からこれからの道徳教育のあり方や課題を展望してみたい。

絶対王政に抗して市民社会への道を切り開き、市民形成としての道徳教育論の基礎を築いたともいえるロック。アンシャン・レジームに抵抗して市民の共和国を構想しつつ、「人間」の教育を説いたルソー。日本という近代国家の建設が必要とした道徳教育の思想(教育勅語等)。これらの思想を取り上げ、そこにある道徳教育上の意味について再考したい。あわせてその再考が、「教科化」がもくろまれる今日の日本の道徳教育に何を示唆・提言するのかについても、議論してみたい。

### 私学の思想史

国民国家の成立・発展とともに整備された近代教育制度は、国や地方政府によって管理・運営される公（官）立学校を中核として構成された。もっとも近代教育制度は、公（官）立学校のみで成り立ってきたわけではない。日本の近代教育史において、独自の建学の精神・思想のもとに設立された私立学校が果たした役割は決して小さくない。私立学校は社会変動にともなう学習・教育需要に敏感に対応し、教育の大衆化や普遍化の促進に大きく寄与してきた。また女性の学習・教育、国際化や異文化交流、地域文化・産業に根ざした人材育成など、私立学校が近代教育の拡充について先駆的に貢献した分野も多い。さらに宗教を基盤とする人間形成など、私立学校独自の教育領域がもつ意義も見逃せない。

ただし近代公教育制度の主流はあくまで公（官）立学校であり、私立学校はそれを補完するものだとの考え方も根強い。一方、公教育制度を構成する私立学校は国によって付与された法的・財政的根拠のもとで公共性を担保・追求することになるが、それが私立学校の建学の思想や独自性の発揮との間に一定の緊張関係をもたらすことも少なくない。

また近年いわゆる「私事化」傾向が強まっていることが指摘され、



報告者：加賀裕郎（同志社女子大学）

松浦良充（慶應義塾大学）

米山光儀（慶應義塾大学）

司会者：西村拓生（奈良女子大学）

「公／私」という二元論的枠組み自体の検証も必要になっている。現在の日本では、4年制大学の77%を私立大学が占め、その在籍学生数は全体の73%である。また少子化によって公立学校の規模が減少するなかで、ここ10年間、私立小学校・中学校は学校数・在籍者数ともに増加傾向にある。日本の公教育制度にとって「私立学校＝私学」は今後どのような役割を果たすのか。

本シンポジウムでは、近代教育の意味を検証するという私たちの学会の共通課題に、「私学の思想史」という問題領域を設定することで新たな視野を拡張することを試みる。近代の教育思想史のなかで「私学」はどのような意味をもったのか。「私学」の思想は、近代教育の思想構造にどのように位置づけることができるのか。そして現代の教育にとって「私学の思想」はどのような課題をもつのか。教育思想史研究において「私学」という概念装置を設定することの意義について検討したのち、同志社と慶應義塾という日本の近代教育の構成に大きな役割を果たした二つの私学の思想の歴史的展開を事例として議論したい。

## 学カテストの暴力性

## ——米国における学カテストと評価体制の構築——

報告者：北野秋男(日本大学)

司会者：山内紀幸(山梨学院短期大学)

現在のアメリカの学カ向上政策は、「ハイスティクス・テスト」「タフ・テスト」と呼ばれる学カテストの結果に基づく一元的で、結果主義的な教育アカウントビリティ政策の具現化が行われている。なぜ、こんな事態になったのか。アメリカで何が起きているのか。アメリカの教育改革は日本とは無縁な「対岸の火事」なのか。実は、日本においても「全国学カ・学習状況調査」だけでなく、各都道府県、市町村においても「学カ調査」という名の学カテスト体制が構築されつつある。アメリカの実態を知るとは、日本の学カテストと評価体制の歩むべき道を考えることにもなる。本報告は、アメリカの学カテストによる評価社会構築を目指す歴史的展開を3期に区分して、主として資本主義社会の変動と学カ評価体制の理論と実態を説明するものである。

第1期は、「産業資本主義台頭期」におけるマン(Mann, Horace:1796~1859)の功利主義的教育観と「筆記試験(ペーパー・テスト)」の登場である。第2期は、「独占資本主義期」における「IQ・知能検査」「標準テスト」の開始である。デューイ(Dewey, John:1859-1952)は、こうしたメリトクラシーや競争原理を根底に持つ当時の教育を批判する。第3期は、「グローバル資本主義期」におけるすべての児童・生徒、学校・教員を対象とした学カテスト体制による評価社会の構築である。1990年頃から多くの州で「州統一テスト」と呼ばれる学カテストが開始されるだけでなく、2002年の「どの子も置き去りにしない法(No Child Left Behind Act of 2001)」、2009年の「頂点への競争(Race to the top)」によって低学カの学区・学校の民営化、教職員のリストラによる新自由主義的教育改革がおこなわれている。アメリカのテスト政策を日本のモデルとすべき危険性を指摘したい。

## デモクラシーが「公衆」を形成する

——ジョン・デューイとリベラル・ジャーナリズムの時代——

報告者：生澤繁樹（上越教育大学）

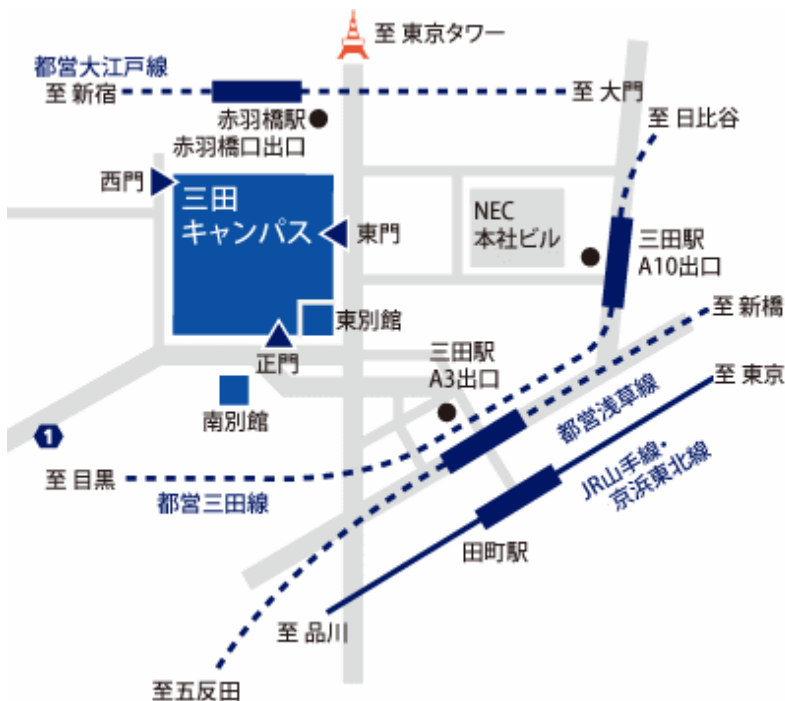
司会者：野平慎二（愛知教育大学）

デモクラシーが「公衆」を形成する。この一見自明なようにも思えるが、少なくとも20世紀初頭という時代を通じて決して論争に尽きることのなかった課題について考えてみたい。電話、ラジオ、映画、出版、広告、自動車、鉄道輸送、化学工業の普及や拡大など、様々な科学・技術が進展し、政治・経済の規模が格段に複雑となり拡大するなかで、知識や技能が専門分化・高度化し、社会構造や人間関係の組織の仕方が変容する。断片的ではあるがこれまで知る由もなかった問題が人びとにより大きな影響を及ぼしたり、あるいはいっそう接近可能な知識を形成したりする。また逆に、問題の焦点や事柄の連関がますます把握しにくくなり、人びとの関心や欲望は拡散し、すべての問題に対して民主的な判断や考察が必ずしも下せるわけでもないという事態も起こる。ロバート・ウエストブルックがいうように、とりわけ1920年代前後の時代には、科学者、専門家、公職者の役割と一般市民としての公衆の役割との連続性や区分をめぐって、デモクラシーの「拡張」と「圧縮」とが互いに拮抗した。デモクラシーが「公衆」を形成するのか、それとも「専門家」がデモクラシーを形成するのか、そのことは『ネイション』や『ニューリパブリック』というリベラル・ジャーナルでもともに活躍したウォルター・リップマンとジョン・デューイとの間のやり取りによってもよく知られている。本報告では、この「デモクラシー」と「公衆」のいくらか馴染みのある問題を、リベラル・ジャーナリズムの時代のなかでのデューイに光を当てながら、やや創造的かつ探索的に再構成してみたい。まずは「専門家／公衆」としての教師の専門性の問題と重ねあわせつつ、プラグマティズムの政治と科学、デモクラシーの教育改革と社会改造、教育における科学専門家と学習者、道徳性を科学的に取り扱うさいの論理的諸条件といった諸問題について読みなおしをはかるつもりである。

# 慶應義塾大学三田キャンパス

東京都港区三田2-15-45

## アクセスマップ



## 三田キャンパスまでの交通機関

- ・ JR山手線／JR京浜東北線「田町」駅下車、徒歩8分
- ・ 都営地下鉄浅草線／都営地下鉄三田線「三田」駅下車、徒歩7分
- ・ 都営地下鉄大江戸線「赤羽橋」駅下車、徒歩8分

教育思想史学会事務局  
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45  
慶應義塾大学文学部松浦良充付  
事務局 E-Mail: [office@hets.jp](mailto:office@hets.jp)